中高生とともに差別と闘う

『青』

吉成タダシ（うずしおブランチ代表）

青

前号の執筆を終えてしばらく、ずっと頭のなかをback numberの「ハッピーエンド」という曲がぐるぐるぐるぐるリピートされていました。

＊

さよならが喉の奥に
つっかえてしまって
咳をするみたいに
ありがとうって言ったの
……
青いまま枯れてゆく
あなたを好きなままで消えてゆく
わたしをずっと覚えていて

＊

おそらくは、恋が終わった女性の心情をうたった失恋ソングです。今の私にはまったく関係のない歌詞です。

前号で、私は自身の両親の差別意識にふれて書きました。部落問題に取り組み始めた初期のころ、こんな言葉も言われました。

「お前はまだまだ青いんだ」

「青い」とは、まだ世の中のことをよく知らない「若さ」に皮肉を込めた意味です。

一方で、「青」には、志や夢、希望といった良い意味もあります。つまり、善悪両方の意味があるということです。そんな私の親の、私の家族の話を、前号の執筆を終えた一週間後に実施した、二年生全体人権学習で話しました。

まず教師が語る

三月十三日、年度終わり。最後の学年全体人権学習のテーマはこう考えました。

「水平社とハンセン病と自分・家族を語る～映像『父が隠した〝家族〟』を通して～」

三学期に入り、水平社について学年六クラスすべてで学習してもらいました。それに加えて、二月にNHK「Dearにっぽん」で全国放映された「父が隠した〝家族〟」を視聴してもらいました。この番組の内容については割愛しますが、そこに生きた人々の生き様と今の自分を照らし合わせてどう思うか。また、登場する人々の家族の生き様を受けて、自分の家族について語り合おう、と計画したのです。

子どもたちにそれぞれの家族を問うならば、私も私自身の家族について語る必要がある。そう考えた私は、二時間の授業の中盤、語りはじめます。

部落問題を何も知らなかった自分
部落の子どもたちと真正面から取り組みはじめた自分
それに対する両親の反発、争い
結婚時、露わになる差別意識
多様な価値観を認められない意識
が生み出す悲劇

そして、私のパートナーと子ども二人の四人が、ばらばらになってしまったことまで告白しました。結果として家族、子どもたちにまで申し訳ない思いをさせたことを吐露しました。

私は生まれてたのかな

神妙な面持ちで聴く中学生のまなざしが、私を射します。それに応え、幾人もの中学生が、それぞれの家族について語りはじめます。

＊

「私は本当に恥ずべきことは自分を隠すこと、人を侮辱することだと思います。

自分には発達障がいの症状を持っているいとこがいます。いじめを受けていた時期もあったそうです。私はそのいとこを守ることもできず、何もできなかったので、今でも後悔しています。だからそのときから自分は人を差別するような言動をしないように気をつけるようにしました。また自分と違う考え方や性格、違うところを受け入れて、それを理解していきたいです。そして自分事としてとらえて、これからも人権学習に取り組んでいきたいです。」

＊

「本当は言った方がいいのか、言わない方がいいのか迷ったんですけど。先生の話を聞いて言おうと思って。

父と母から聞いた話なんですけど。父が母の実家に結婚の挨拶に行ったとき、お昼の『よろしくお願いします』みたいなときは、『任せます』みたいな、そういういい感じの雰囲気で終わったらしいんですけど、夜になって私の母方の祖父と父が二人きりで話しているときに、本当は部落の人ではないのかと訊かれたことがあったらしくて。そういうのを訊いてはいけないのは分かってるんだけど、自分の娘を嫁がせるには、そういうのを知っておきたいと言ってたらしくて。

それで父はそれに対して、『ボクは部落出身ではないです。親戚にも部落出身の人はいません』って伝えたのと一緒に、『彼女が部落出身であってもなくても、結婚したいという気持ちは変わりません』って言ったらしくて。そうやって言う父がすごい格好いいなって思ったのと、もしそこで父が部落出身だったら、私は生まれてたのかなって凄い怖くなったし、そういう質問があったってことは、私が知らないだけで、身近に部落差別がまだ残っているっていうことを、凄い実感して恐くなりました。」

＊

「私は生まれてたのかな」に鳥肌が立ちました。それに応えるように発言が続いていきます。

＊

「私には夢があります。それは何か言えないけど、部落などで人を差別することで、その人は自分の夢や生活を奪われたり、悪い場合は命を奪われたりします。それほど怖いものはありません。人は自由に生きる権利があります。差別されて殺されるのは違うと思いました。」

＊

差別は命と直結する問題だということを、明確に全体に問いかけます。

そして授業の最後に私はこう告げました。

「父が一週間前に亡くなりました」

会場のまなざしが、一斉に私に注がれます。

（つづく）

イラスト　中島　亜唯